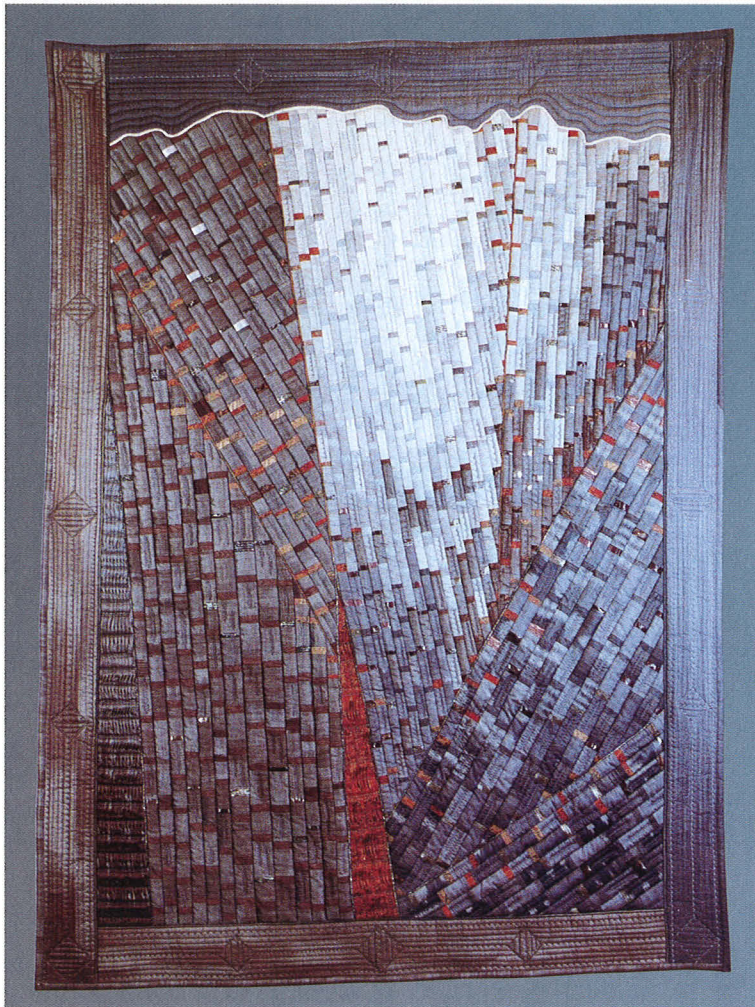


# 文化高知

2005年7月 NO.126



「木漏日」 高橋利美

〈もくじ〉

|   |      |       |
|---|------|-------|
| ある朝、考えたこと.....                          | 丸地真人 | 2     |
| 「繰り返せない」美しさ～自然、音楽.....                  | 島田 広 | 3     |
| 「演劇祭KOCHI2005」と「かるぽーとギャラリー」から考えたこと..... | 西村和洋 | 4～5   |
| 心に響くふるさとの歌声.....                        | 島田美香 | 6～7   |
| これからの街路市.....                           | 石本昭雄 | 8～9   |
| 「青いファイル」の背景.....                        | 小松康夫 | 10～11 |
| 偶然と必然の出会い－新資料と向き合って.....                | 野本 亮 | 12    |
| かるぽーと初夏の事業のご報告.....                     |      | 13    |
| 風俗歳時記・風伯.....                           |      | 14～15 |

(財) 高知市文化振興事業団



# ある朝、考えたこと

丸地 真人

通勤のバス車内で新聞を読んでいた。 「論理力」を鍛えるために仕事の後、セミナーや講座に通う社会人が増えているという記事があった。

（五月二十三日付「日本経済新聞」十五面 スイッチオン・マンデー「ビジネスの武器は論理力」）記事によると、この場合の論理力とは「物事を筋道を立てて理解し、他の人に説明できる能力のこと」という。講座には若い世代が多く参加しているらしい。その向学心に感心する半面で、「論理力」や「クリティカル・シンキング」という言葉に対して少し違和感を覚えて、考え込んでしまった。

つまり、「大切なことは何か」「そして、それは何故か」ということを本当に理解していなければ、いくら説明のテクニックに長けていても、その説明に「説得力」はないからである。それがわかっていないプレゼンターによるプレゼンは致命的である。単なる言葉遊びや数字遊びになってしまふからだ。

大切なことは何で、その理由は何か。それをしっかりと説明できるには、少なくともそのテーマや周辺のことについてよく勉強している必要がある。

ここで言う勉強とは実は読書のことを指している。私は職業柄、読書の重要性を強調しているのだが、では、本を読みさえすれば説得力のある説明が出来るかと言えば、そう単純な話でもないと思う。その理由は二つある。

そのひとつは、論語の爲政第二に「子曰く、学んで思わざれば則ち罔し。思うて学ばざれば則ち脆し。」とある通り、読書だけでは意味がなく、読書と思索の間を何度も往復することに意味があるからだ。自分の

経験を振り返ってみても、本のコピーは無意味であったし、時には有害でさえあった。読書とは、結局、自分で主体的に考えるヒントを得るための行為である。本を読んで考え抜いて到達した結論でなければ、説明者は自分の説明に自信が持てないはずだ。自分を「説得」出来ないでいて、どうして他人を説得出来るようか。

もうひとつは、これはごく当たり前のことなのだが、説明は人に対してするからである。人は普通、説明者を人として受け入れることが出来るから、初めて論理を受け入れることが出来る。これが「人は情で動く」と言われる所以ではないかと思う。そのことが本当にわかるためには、ある程度の人生経験が必要だが、特に失敗の経験が必要だと思ふ。その「失敗」についても考えてみる。失敗の経験は非常に貴重だし、重要だと思ふ。失敗するのは、現実世界で何らかの挑戦をするからである。その意味で、取り返しのつく失敗は、むしろ奨励した方がいいと思うくらいである。何もしなければ失敗はないが、成功もあり得ない。「プロジェクトX」などを観ていても、プロジェクトのリーダーもメンバーも、数限りない失敗の積み重ねの中から、成功への鍵をつかむ。1000

の人は存在しないし、人が集まって出来ている組織にも100%は存在しない。何か新しいことをやるうとする時には、リーダーもメンバーも試行錯誤があつて当然なのである。

その「現実」についても考えてみる。「現実」という言葉は非常に重みがあるので、ともすると読書より上位に位置付けられてしまふ。「現実的」「現実主義」という言葉にも人は弱い。でも、そこでよく考えてみて欲しい。人ひとりが一生のうち経験出来る「現実」とは一体どれほどのものなのかを。

読書も万能ではないが、同じように現実も万能ではない。そのどちらによつても、人は鍛えられ、その人の生活は豊かにされていくべきものだと思ふ。だから、どちらも重要なのだ。その朝は、こんなとりとめのないことを考えつつ、追手門をくぐったのである。

（筆者注）論語の引用箇所は吉川幸次郎／著『論語』上 朝日新聞社刊より

（まるちまさひと／高知県立図書館）

# 「繰り返せない」美しさー自然、音楽

島田 広

私は少年の頃から登山を趣味としている。親元にいた頃は高知県内の山を駆けめぐったものだ。そして今でも、住居のある神奈川を中心に仕事の合間を縫って、感性の赴くままに自然と触れあっている。そんな中で同じ道を何度か繰り返し辿ることも多々ある。

自然とは不思議なもので、見かけ上は「繰り返し」といっても殆ど毎回のように不意の発見がある。それは、「ある日、ある時」の川の奔流や森のざわめきだったり、聞き慣れない小鳥の囀りだったり…といずれも他愛ないことなのだが、私にとつてそれら全ては、実は二度と繰り返すことの出来ない美の体験となっているのだ。

ここ数年、強烈に感じていることがある。それは、音楽という人間以

外の自然が持ち得なかつた、まさに人間が生み出した存在の中に、自然の中で感得する体験と全く同じ様相を見て取ることが出来るということだ。つまり、あらゆる音楽には「繰り返せない」美しさが備わっている。

例えば、私は作曲するとき楽譜に書き付ける。楽譜は音楽を繰り返し再現するために工夫されたものである。しかしこれを別の人が演奏する時、その感性の違いによつて、しばしば思いもよらない美しさ・面白さが生じる。いうまでもなくそれは一度限りのものである。仮に自分で演奏したとしても、様々な状況の違いによつて、楽譜を書いたときの感覚とは違うものが不意に入ってくる。このごろはCDなどの普及によつて、音楽が「繰り返せる」有形のマテリアルとしての側面が強まって来ているが、音楽の本当の魅力は、そこで

は希薄になっていると思ふ。

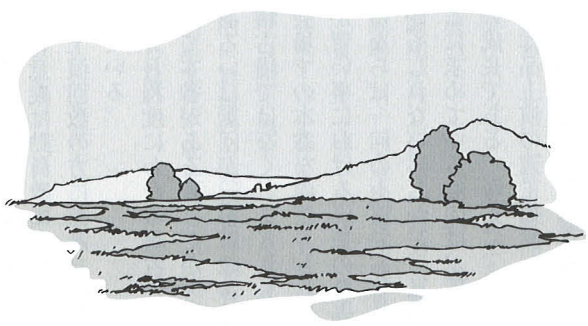
私は自然と音楽のそんな魅力の一致を見るとき、人間が自然のなかの一部であるからこそ、いつからか自然の反映として音楽という存在を求め、生み出したのではないかとさえ思ふ。もちろん音楽の直接の原動力が、人と人との関わりであることは間違いない。しかし自然というバックボーンが無くなるか、もしくはそれを感じられなくなると、人間も音楽もすぐに枯渇してしまうのではないか。「繰り返せない」美しさというものは、意外と言葉では表現しづらく、すぐ忘れられてしまうものだから。

私の中に生き続けている故郷の自然。その瞬間瞬間の美しさが未来に向かつて、形を変えながらも続いて

いつてほしいと切に願う。でもそれと同時に、そんな自然の存在を常に感じられる世であつてほしいと思ふ。

今、私に出来ることは「繰り返せない」自然…それは人の中にもある…を感じ続けること、そしてそれを何らかの形で音楽に反映することだと思つている。

（しまだひろし／作曲家・横浜国立大学教育人間科学部助教授）





# 「演劇祭KOCHI 2005」と「かるぽーとガレリア」から考えたこと

西村 和洋

私たち「高知演劇ネットワーク・演会」は、地域における演劇状況の活性化を目指して結成し、今年で五回目の演劇祭を開催することができた。

そもそも高知で活動する若手の演劇人たちが中心になってつくったネタに観客が増えるということにも繋がりが、そうした形での批評性を高めることもできた。あらためて感慨深いのは、この作品が二千五百年前に書かれたギリシア悲劇だということだ。

以上のような目的をもった上演形態をガレリアでなく、もし仮に「かるぽーと小ホール」で行ったらどうだろう。二週末六ステージをこなすために借り上げれば、それだけでも作品製作費のほとんどを使い切ってしまう。それでは本来の公演などとうてい打つことはできない。ゆえに、高知演劇ネットワーク・演会に参加する劇団は、劇団独自の形ではまだ一度もかるぽーと小ホールさえも借りて上演をしたことがない。つまりそれは県民文化ホールグリーンで、あるいはかるぽーと小ホールで、もしくは美術館ホールでの一回きりの上演よりも複数回の上演を行う意義に重きをおいているからに他ならない。

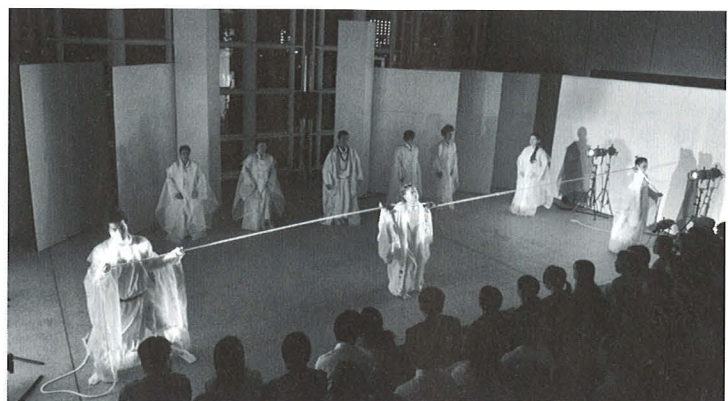
しかし、それでいいのだろうか。ここで地域における公共ホールの役割を考えたとき、地域で活動しているアーティストが活用しようとしているアートスペースの存在に疑問を感じざるをえない。極端に言えば、現在のかかるぽーと等の公共ホールの多

ネットワーク活動だけに、結成当初は「それでいい何ができるのだ？」と揶揄もされた。しかし同じ地域で活動する演劇人たちが意見交換を繰り返して、研鑽を積み重ねてきたこれまでの活動は、自分たちに客観的な自信をもたらした。また各方面からの賛同と多くの支援を得られるようになり、この五年間で当初の予想を大きく上回る成果を上げてきた。

さて、今年の演劇祭KOCHI 2005は、これまでの演劇祭の試行錯誤をふまえてなるべく上演日程を集中し、またなるべく会場を分散することなく開催する形をとることにした。そして、四月から六月の間、前半を高知市文化プラザかるぽーと3Fガレリア、後半を棧橋通の芝居小屋ベル・テンポを中心に、全十団体の上演が決まった。

特にかるぽーと3Fガレリアを約一カ月あまり占有させて貰ったことは、たいへん意義深かったと言える。公共ホールの一部を一カ月の間占有することは通常あり得ない話でもあり、演劇祭KOCHI 2005に対するかるぽーとの理解に深く感謝している。

今回かるぽーとでは、演劇集団S.T.H.がソフォクレスによるギリシア悲劇「アンティゴネ」を二週末に



くは中央から来るイベントやコンベンションのための「ハコモノ」としての機能と、いわゆる一回こっきり身内に来てもらう習い事の発表会の場ではないような印象を受けるところがままある。近年、各種ワークショップを丁寧に企画していただき、学習させて貰っているのだが、こと「ホール」の活用に関しては、地域のアーティストを育てようという工夫が今ひとつ乏しいと感じられる。

わたり計六ステージの上演を行った。これはS.T.H.としても、また演会としても初めての取り組みであった。ガレリアでの客席数は一ステージにつき百席余り設定され、有り難いことに全部で五百三十人余りのお客さんが足を運んでくれた。この五百三十人余りという数字が興行として多いか少ないかは別にして、例えば県民文化ホールのグリーンでならば、超満席ではあるが一回の上演でほぼ



消化できる数字である。しかし、今回の公演の意義は動員数にあるのではなく、上演回数の方にあると私たちは考えている。

通常二カ月程度にわたる稽古の最終形として本番があるわけだが、俳優が、あるいは劇団が一番訓練されるのは稽古場ではなく、まぎれもない上演会場での本番なのだ。もしこれが何か習い事における成果の発表会であるならば一回の上演でもじゅうぶんかもしれない。しかし、私たちがそこに求めているものは、俳優や劇団の成長である。ゆえに、六回の本番と作品上演の適正規模として約百席余りの客席が組まれたのだ。

また連続六回の公演でなく、三回ごとの二週末六ステージということにも理由があった。ひとつにはお客さんの観劇機会を確保しようとしたこと。それはつまり一週末だけではなかなか都合がつかず、観て貰えないことが過去にもよくあったことを考えてのことだった。それは同時に、私たちが普段仕事をしながら演劇活動をしている社会人の集団であるため、六回もの連続公演は仕事の都合上不可能であるということ逆手にする意味もあった。結果、公演を観た一週目のお客さんが、二週目にはまた別のお客さんに声をかけ、さ

もちろん高知で活動する若手演劇人たちのレベルはまだまだ幼いかもしれない。しかし地域で活動するアーティストたちが積極的に活用するアートスペースこそ、地域における公共ホールの理想的な姿ではないだろうか。

ゆえに今回のガレリアでの公演は本当に感謝に堪えない。高知演劇ネットワーク・演会の活動を理解していただき、演劇祭会場に苦慮する私たちに異例の一カ月使用を認めていただけだ。騒音のこだまする電車通りに直接面した半野外的空間であるため「演劇の公演会場として理想的だったといえるのか」という観客の声も聞かれた。しかし、約一カ月余りに及ぶかるぽーとガレリアでの連続公演は、それでもたいへん意義深いものであった。

最後に、演劇祭KOCHI 2005の後半戦が行われる「芝居小屋ベル・テンポ」に言及しておきたい。高知演劇ネットワーク・演会に参加する劇団NewSun菌の持ち小屋でもある棧橋通の「芝居小屋ベル・テンポ」は、実は道路拡張工事のために間もなく取り壊されようとしている。落成以来、小さいながらも高知の若手演劇人を確実に育ててきたアートスペースが今まさになくなる

うとしているのだ。昼夜を問わずこの芝居小屋で活動を続け、「ベル・テンポ」を愛してきた者たちは、この後代わりの空間をどの様に求めて良いのか暗中模索状態である。「ベル・テンポ」は、稽古場と作品発表の機能を兼ね備えた、たいへん理想的な創作空間でもある。果たして、高知にそうしたアートスペースがあるだろうか。

前述したように、演劇は稽古場で育まれるものではなく、劇場で育つものである。地域の文化を育てる役割が地域の公共ホールにあるならば、これまでの「作品発表の場」としてのホールではなく、「作品創作の場」としてのホールに大きく質的転換を図る必要があるように思えてならない。地域のホールと共同し、地域の俳優や劇団が作品創作のために足繁く通う劇場。そして単純に助成金をバラまくような支援ではなく、積極的に公共ホールを使う者たちを育てるような大胆な施策。そうなることが結果的に地域の公共ホールを育み、地域の劇場文化を成長させるのだと思えてならない。

にしむらかずひろ／演劇集団S.T.H.主宰・高知演劇ネットワーク・演会 代表



# 心に響くふるさとの歌声

島田美香

うさぎ追いし かの山  
小鮒つりし かの川  
夢は今も巡りて  
忘れがたき 故郷

高知での少女時代、私の夢は童謡歌手になることでした。懐かしく耳になじんだ歌を、父や母に聴いてもraithたい思いもあり、今年の夏、日本の童謡や唱歌を集めた演奏会をCDに録音することにいたしました。その一番最初にこの曲を歌うつもりですが、歌いながら思う野山や川、海は、やはり我がふるさと高知の懐かしい風景です。



昨年十二月、かるぼーと大ホールにおいて行われた「市民が歌う第九コンサート」に、私も高知出身者のひとりとして参加させていただいたことは、心から嬉しく光栄なことでした。

情熱あふれる若い指揮者平井秀明氏のもと、高知交響楽団と四国フィロハーモニーの団員の皆さまによるエネルギーでダイナミックなオーケストラと、高知市第九シンフォニー合唱団の高らかな澄んだ歌声が、ホールいっぱい力強く響き渡り、第四楽章の「歓喜の歌」は、まさしく私の心の響きそのものとなりました。

高知の熱き血潮で一丸となった演奏は、太平洋のようにおおらかに明るく、かつ情熱的なものでした。バリトンとメゾソプラノのソリストを務められた小原浄二・伸枝ご夫妻は、高知大学で教鞭を執られて十数年になり、最近はずっかり高知人として地元になじんでくださっていて、演奏会終了後の打ち上げの席でも、「高知だからこそできる演奏会がある!!」と力強くおっしゃり、出演者全員から拍手喝采を受けていらっしゃいました。

コンサートミストレスを務められた大谷康子氏も、ご両親の出身地高

知での「第九」には格別な思いがあった様子で、終演後の楽屋で「本当に良かった……」とうつすらと涙を浮かべていらっしやうったことがとても印象に残っております。

「音楽のある街づくり」をテーマに、高知の音楽文化を推進してこられた先生方、関係者の皆さまのご努力が実を結んだ、すばらしい演奏会でした。

昨今、ニュースで伝えられる心の痛む事件を思うたび、この「心の貧しい時代」に、音楽が社会に対してどんな役割をはたせるかと深く考えます。

「自然は心を映す鏡」とは美しい日本の風景を描かれた日本画家の東山魁夷氏の墓碑銘ですが、自然や音楽に向かい合い、それを「芸術」という形に表した時、魂や精神は浄化という道を辿って、自分自身の心を鏡のように照らします。「そこ」に映し出されたものに、己の心を見る

のです。

二十年前の文化高知に掲載された、高知医科大学学長であられた森本正紀氏の言葉に、深く心を打たれたものがありました。

—高知医大に来て、廊下を一見、塵一つ落ちていないのにまず驚く。—  
—中略—時に見慣れぬ人が煙草に火をつけたまま玄関から入り、まれに廊下を歩くのを見かけるが、あまりにも綺麗な廊下に気がつく、一度手にした煙草の火を消してポケットにしまい込んでしまう。—

きれいなものをきれいと思ひ、それを汚すまいとする、この心こそ大切なものなのだ。

また、「いつも心に太陽を」という言葉と「唇に歌を」という言葉は同義語ではないかとつねづね思っているのですが、私自身、音楽や歌に心を慰められたり元気づけられたりすることがよくあります。

高知にいる高校一年生の甥は、中学からずっと吹奏楽部の活動を続けています。早朝からの練習にも熱心に通い、音楽が彼の生活の中心となっているようです。先日私が「あなたにとって音楽とは何？なぜ音楽をやっているの？」と尋ねると、次のような答えが返ってきました。「僕にとって音楽とは、悲しかつ

たり嬉しかったりした時の心の表現やと思う。何でやりゆうかというところ張って一生懸命やった時、達成感があるからやるのかねえ？」  
私はこの言葉を聞いて、甥が人生の中で音楽に巡り会えたこと、また彼の音楽を支え、指導してくださった先生方に深い感謝の気持ちを抱きました。

ふるさと高知を心に思い描く時、いつも、太平洋の彼方を見つめている桂浜の坂本龍馬の銅像を思い出します。

土佐の気候・風土は、いつの時代にあっても、自由思想とおおらかな氣質を持つ多くの偉人たちを生み出してきました。個人の小さな利益ではなく、世の中の行く末を見つめ、すべての人の幸せに通じるような志や夢をいだく人をはぐくんできたように思います。

高知の音楽文化活動を思うとき、たくさん先生の熱意によって、若い芽がはぐくまれ、音楽を奏でる喜びを共にできることに、感謝と誇りを感じずにはいられません。

(しまだみか/オペラ歌手)



オペラ「マクベス」より、マクベス夫人  
photo by Ayako Miura  
2002.9.1 神奈川県民ホール  
(首都オペラ公演)  
指揮：児玉 宏  
演出：ヴァンフリード・パウエルファイント



オペラ「マノン・レスコー」より、マノン・レスコー  
photo by スタジオ・スペースフォト  
2004.11.28 こまばエミナース  
(LIP presents OPERA公演)  
指揮：矢澤 定明  
演出：大島 尚志

島田美香氏プロフィール  
伊藤京子氏に師事。国立音楽大学声楽科・同大学院オペラコース修了、現在に至る。西部中学校において、竹島節男氏に音楽の手ほどきを受け、丸の内高等学校音楽科に進み、(故)徳弘定幹氏に音楽を学ぶ。主な受賞歴は、第22回日声楽コンクール第一位、第20回トイ・タル・モンテ国際コンクール優勝、第10回下八川賞受賞。今年、十一月二十七日(日)オペラ「蝶々夫人」で蝶々夫人を歌う予定。また、八月九日(火)「日本の歌(童謡・唱歌・叙情歌)」CD録音のため、目下、師、伊藤京子氏指導の下、研鑽を積んでいる。



# これからの街路市

石本 昭雄

「会長さんもお店を出されているのですか」、県外から日曜市の研究に来高されたお客さんから、今日も同じ質問を受け同じ説明を繰り返している。ここは高知名物日曜市の一画、もつと言えば私が出店許可を受けている小間の店先である。全国的に見ても、このような朝市、街路市の世話係は自分の店を持たず、出店者のリーダー役に徹し、組合長などはひとかどのポストとして認められ、地方議会の議員さんを兼ねているケースも多いようである。それに反して、高知ではまず出店許可をいadakaneば一人前と見られず、組合員とも呼ばれないのである。私たち出店者仲間は、まずはじめに道路占用許可を得て、さらに警察のお墨付きを添えてはじめて各曜市の現場に立つことができるのである。そして、その許可業者の大半は農家生産者の集まりである街路市生産出荷組合に結集している。そこに集まった人の中から役員、世話役を選ぶのだから、

冒頭のような言葉は私たちにとって奇異に感じられるのである。農家以外の出店者は、取り扱い商品ごとに単位組合を組織し、それらの組合の上部組織として連絡協議会や連合会が結成され機能している。全体として見渡せば、かなり密度の濃い組織であると思う。

市の仲間はみんな仲良しである。各曜日とも年間約五十日テントを連ね店を張っている。最近では農村社会でもつつい疎遠になりがちだが、早朝から夕暮れまで良きパートナーであり、ライバル同士でもある。作物の生育状況のニュースから仔猫のやりとりまで（人間同士のやりとりも）家庭の事情も、今日の売り上げ、おおよその財布の中身も推測できる仲間意識は街路市のユニークな連帯感を生み、互いの絆と友情を確かめあうのである。

私が子供の頃の日曜市は、帯屋町

街路市三百余年と言いながら、私たちは井の中の蛙の時代が長かった。全国的な視野の中でどのように評価され、位置づけられるのか。第三者の冷静な感性で判断してほしいということをしきりに考えるようになっていた。たまたま十数年前から同じ考えをもつ各地の朝市から全国朝市サミットを開きたいという声が盛り上がり、高知の出店者も呼びかけに応じて参加することになり、すでに数回の出場を重ねている。

私たちに三百余年の歴史と経験があるが、全国的にはそれ以上の期間、朝市を開催してきた歴史を誇る都市もある。ともかく刃を合わせてみれば力量の程は判らない。

毎回毎回、開催地の歌い文句に日本三大朝市のキャッチフレーズがあり、必ずその開催地が三大朝市の中の一つに（本音はトップに）歌い上げられているのだ。お国自慢もここまで来たか、という感じだが、ひいき目にも三大を冠するにはどうも不自然と思われる都市もあった。

の商店街の店先にあった。現在の場所へ変更になったのは終戦後である。運搬車が車力やリヤカーから軽トラになった。一番若い役員と自他ともに認められる存在だったが、先輩諸氏が次々と引退され、気がつけば長老組のリーダーになってしまった。前述のように私は心ならずも長い間世話役を続けてきた

が、曲がりなりにも勤めることができたのは、会計に適任者を得ることができたからである。生産出荷組合という広い組織にも、上部組織である街路市組合連絡協議会にも、また各地区ごとの支部組織である地区会にもそれぞれ専任の会計さんがあつて、地味に篤実に金庫番を勤めてくださっているのである。組合員の信頼を裏切ることなく、予算と照合しながら会計処理に当たってくださっているのである。それぞれにそ

の役目にあさわしい会計さんが風格と奉仕の精神でその任に当たってくださることに感謝感激の思いである。AさんBさんCさん、それぞれの場で責任感と人柄で組織を活性化させてくださった。そのポストに立派な人材を得た有難さを感じ思っている。



何回か先進地を見せていただき、参加者の間では私たち高知の結論は出された。われわれは決して劣ってはいない。まちがった道も歩いていない。胸を張ってゆこうと意見は集約された。市民消費者のキッチンへ私たちの地産地消の生産品が街路市から流れてゆくのである。私たちはそこにあるべき流通の実態を見いだすのである。さあ仲間よ、市民の皆さんとともに、自信をもって進もうではないか。

最後にあえて地名は出さないが、全国に名の通った有名朝市の市民の一人が、「今まで朝市でモノを買ったことがない」と吐き捨てるように言った言葉が私の印象に残っている。われわれも一歩誤れば、明日、高知市民からこの言葉を浴びせられるかもしれないのである。

いしもとあきお／高知市街路市  
組合連絡協議会長





# 「青いファイル」の背景

小松 康夫

## ★自由民権記念館と高知新聞 本格的な共同作業で

★日本に誇る言論の風土濃縮

仕事場、乱雑なデスクの上には雑多な単行本や資料類、などが堆く積み上げられている。左脇には担当する記事や原稿のスクラップブックを並べる小さな本立てがあり、その中に「新聞百年展」という表題を記入した青い表紙のファイルがある。日露戦争真っ只中の明治三十七年九月一日に創刊された高知新聞。その一世紀の「来し方」を、創刊以前に土佐で誕生し土佐の優れた民権家によって日本全国に燎原の火のように広がった自由民権運動と融合した

企画展のファイルだ。そこには中江兆民、黒岩涙香、植木枝盛、小野梓らで代表される民権家の飛躍の軌跡や、高知新聞百年の歴史を「どう見せるか」の議論、激論、交渉の痕跡がにじむ書類などが閉じ込められている。

このファイル、半年くらい前までは綴じ込む文書や資料が日々増え、関係する人物の名前も増加するばかりだったが：今は、もう、それも終わってしまった。

さて、新聞百年展。これは「今一度、真の言論活動とは何か、を問い直す機会にしたい」などの狙いも込めて高知新聞、高知市立自由民権記念館、横浜の日本新聞博物館の三者が共催し、「創刊百年」の昨年、平成十六年十月九日から十一月十四日

本格的な準備に取り掛かっている。この時期、最も意識したこと。それは「狙い、趣旨、主張をどうするか、ということだった。

高知の風土は「自由民権運動」を育み、議論好きの「いごっそう」、「はちきん」を生んだ土地柄だ。そんな気骨ある土佐人に愛され育てられた新聞が高知新聞だったのではないかと、ということ、この展示会のキーワードは「自由民権運動の熱気」であり、そんな人々と風土に育てられた「高知新聞の実像」を浮き彫りにすること。この二つを大きなテーマに設定。それぞれの展示をうまく調和させ、いわゆるシナジー（相乗）効果を上げ入場者に高知を強く印象付けたい：そんな思いを受けて企画は船出する。

やがて篠田副館長は転出。後任として着任した筒井副館長（後に転出）は、最初から最後まで懸命に自由民権運動の展示資料の検討、パネル制作などに腐心した同館の氏原学芸係長を石本館長とともに支え、見ごたえのある展示群を構成した。実行委員会メンバーらが新聞の先輩社員に呼び掛けたり、本社内の倉庫などを探索した結果、新聞百年を象徴的に物語る貴重な資料類、展示物などが

徐々に充実する。

創刊から現代までの流れを映像も含めてビジュアルに構成。貴重な史料を駆使し言論弾圧に抵抗し新聞史に残る土佐の「新聞の葬式」や高知新聞創刊前夜の民権家らの熱気なども特集したこの展示会。「全体として、挑戦の意欲に満ちた元気な高知県民と地方紙の姿を印象的に紹介することに成功した」と新聞博物館の関係者は褒めてくれたが、これは単なる社交辞令ではあるまい。横浜展会場を訪れた首都圏の人々が備え付けのアンケート用紙に、「高知がここまで優秀な民権家を輩出していたとは知らなかった。高知新聞の頑張り」と、その背景にある土佐人の反骨精神、議論好きの性格に随分と感動した」という感想を数多く書き記しているのである。

自惚れを承知で言わせてもらえらるのなら、結局、高知には自由民権記念館があり、そしてそこに展示されている民権家らの反骨の精神、伝統を受け継ぐ高知新聞とその熱心な愛読者が存在するという事実。それをしっかりと周知させることに成功した企画だった、ということなのだろう。

まで自由民権記念館で、翌十七年一月八日から三月十三日まで新聞博物館で開かれた。展示会の正式名称は、「自由民権と土佐 高知新聞の100年」という。

二会場とも大好評だったのだが、実はこの企画、不安だらけの旅立ちだった。一番心配したのは、「果たして展示資料が残っているかどうか」ということだ。戦前の新聞のバックナンバーは空襲に遭い焼失。社屋も焼け落ちている。果たして展示用の史料は残っているのか。



大勢のジャーナリストも詰めかけた「横浜展」（日本新聞博物館）

## ★高知新聞100年記念館に結実

（東雲センター）

横浜展の「その後」についても書き残して置かなければなるまい。東大法学部付属明治新聞雑誌文庫ほかから借りていたものはすべて返却。残ったパネル、資料類のほとんどすべては高知市東雲町の高知新聞東雲センターに完成した「高知新聞100年記念館」で収蔵、常設展示している。展示品の中には、高知展、横浜展でも大変な人気を呼んだジャーナリズム史上に残る「新聞の葬式」を再現した迫力のある群像もある。



子供たちにも人気の「新聞の葬式像」

ファイルは、そんな不安を抱えながらの出発から閉幕までの間にやりとりした関係機関、担当者とのファクスや書類などを納めている。それによると平成十四年夏ごろから自由民権記念館の篠田副館長（当時）と連絡を取り合うようになり、新聞博物館の徳永康彦さん（後に日本新聞協会に復帰）とも「共催」を前提とした話を始めている。

そして、翌年、自由民権記念館と高知新聞が「自由民権と土佐 高知新聞の100年展」実行委員会を結成。委員長に高知新聞の小笠原俊明専務、副委員長に藤戸謙吾常務（当時）と自由民権記念館の石本館長が就き、

このセンターには高速オフセット輪転機が稼働する様子などを見学するコースもあり、小中学校生らが授業の一環として利用する一方で、高齢者教室、学級の受講生らも大勢訪れ現代の新聞のアウトラインを研修している。100年記念館の開館で、創刊号から最新の新聞ができるまでの「百年史」を楽しむと同時に新聞の骨格に流れる民権運動の伝統やその精神も問い直すことが可能になった。

「新聞百年展」の青いファイルを眺めながら今更のように思うこと。ここには自由民権記念館と高知新聞という珍しい組み合わせのコラボレーションで成功させた企画展の数年間のドキュメントが詰まっていると同時に、「言論」という手段のみが人間に許された武器であり、それがいかに大切か：それを改めて考え直すきっかけを与えてくれた三年間の不定期な「日記」に思えてくるのである。

「100年記念館」の見学等の問い合わせは東雲センター総務部（088・885・2211）まで。（こまつやすお／高知新聞編集委員）



博物館学芸員という仕事に携わる者にとって、これまで見たこともない、新しい資料との出会いは、最も好奇心をかきたてられる一瞬かもしれません。

歴史民俗資料館に十年以上勤務し

野本 亮

## 偶然と必然の出会い —新資料と向き合っ—

学芸員シリーズ①①

てきた私も、偶然と必然、或いは運命的ともいえる様な「出会い」を経験してきた一人です。

私の専門は中世、それも戦国時代ですので、これまで、長宗我部氏に関連する調査・研究を主に行ってきた。

ました。そして、そのエキスを注入して、「四国の戦国群像」「秀吉と桃山文化（地域展 秀吉と元親）」「長宗我部元親・盛親の栄光と挫折」といった展示会を開催してきました。

これらの長宗我部展三部作は、すべて新発見資料の存在によって開催できたといっても過言ではなく、「えっそんなものが…」というサプライズ情報は、誠に有難いものでした。展示会の構想は、こうした新資料によって左右されることの多い私にとって、この「新情報」をいかにキヤッチするか、つまり「情報ソース」をいかに確保するかということ、業務上かなり重要な意味を持っています。

元親の弟、香宗我部親泰所用の甲冑や、戸次川合戦で戦死した武将の兜があるという話。また、雑賀衆宛の元親文書などに関する情報は、偶然耳にした場合と、綿密な調査の結果として、必然的に出合ったパターンに二分されますが、私の経験では圧倒的に前者が多かったような気がします。

必死に追跡している時には出合えずに、諦めかけた時、ヒョーンなことから出合う確率の方が高いというのは、本当に不思議な話ですし、こんな時には、つくづく運命的なものを

感じます。

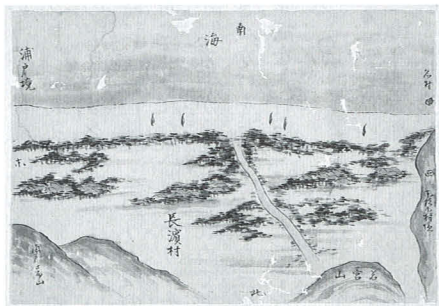
ところで、歴史館の歴史分野は、土佐の中世以降についても調査研究を行っていませんから、当然、近世・近現代の新資料もその対象としなければなりません。そして、割合からいえば遙かにこの時期の資料との出会いが多くなるのは必然です。

平成十五年の晩秋、東京の某古書店が発行した商品カタログに、偶然にも江戸時代後期頃の土佐各地の浦方（海辺の集落や港を中心とするエリア）を描いた古絵図数十枚が掲載されました。

年明けすぐに古書店に調査に出かけた私が目にした古絵図の山は、まぎれもなく、これまでに確認されていなかった新発見の資料群でした。

そもそも、土佐の浦方に関する資料は、台風や津波などの災害によってその多くが失われており、こういったビジュアルな資料で、当時の風景を知ることができるのは本当に貴重です。土佐の浦々だけを個別に集めたコレクションとしては、他にあまり例がないかもしれません。

これらの資料は、一つとして同じ描写がなく、海岸線・集落・往還・寺社・峠・河川・山並み・崩落地・漁場などが個性豊かに描かれています。また、当時の時代を感じさせる



江戸時代の長浜村「自然豊かで人家もまばら…」

当館では、この新発見資料（約八十点）を県民の皆様に見ていただくため、本年十一月二十六日より、来年二月二十六日まで「新収蔵古絵図展」描かれた土佐の浦々」と題した企画展を開催します。

どうか、この機会に、失われたかつての海岸線、自然豊かな海辺の原風景をご観覧ください。そして、偶然の発見によって里帰りを果たしたこれらの資料と静かに向き合ってください。

（のもとあきら／高知県立歴史民俗資料館学芸員）

## 高知市文化プラザ かるぽーと 初夏の事業のご報告

### ◆市民の芸術の広場 「第57回高知市展」

アンデパンダン（公募・無審査）の美術展として市民に親しまれている高知市展が、五月二十八日～六月十二日、市民ギャラリーで開催されました。

今年、絵画、日本画、書道、先端美術、彫塑、陶芸、工芸、写真、ペン字、デザインの十ジャンルに、十六



歳から九十歳までの計五百七十名の

作品、七百十一点が出品されました。特に絵画、デザイン、工芸の若手作家や初出品者の作品は今回展に初々しい雰囲気を出していました。

また、北海道北見市からは美術交流作品二十八点が寄せられ、北の大地ならではの風景写真や水墨画に鑑賞者は熱心に見入っていました。

かるぽーと開館以来、市展の目玉となっている参加・体験型の美術体感イベント「あなたダビンチ、ぼくピカソ」は、今年も晴天に恵まれ、前広場に設置された野外テント、公民館の各実習室、大講義室を会場に九ジャンル十二ブースに千人以上の小・中学生、親子連れが参加し、カードで毛糸を組んでキーホルダーにしたり、手描き染めのTシャツ、せっこう☆おにぎりを作ったりとさまざまな美術体験を楽しみました。「今年もこのイベントに参加するのを楽しみにして来ました」という親子連れもおり、このイベントが、子供たちや保護者に定着してきたようです。

発表と鑑賞の場の提供として半世紀以上続いている高知市展は、子供たちを巻き込みながら、創造者・鑑賞者の育成という新たな役割を担いつつ、美術の楽しさ・面白さを市民のあいだに広げる事業となっています。

### ◆やまたのおろち

高知市文化プラザ活性化計画のプログラムの一つとして、六月四日には大ホールにおいて、音楽と朗読による幻燈劇と伝統芸能である石見神楽を上演しました。

第一部では、高知在住の音楽家たちによる文化発信として、「音楽と朗読による幻燈劇・やまたのおろち」を上演。この作品は、日本を代表する画家故赤羽末吉氏の迫力ある絵をプロジェクトで上映、端正な舟崎克彦氏の文の朗読と、武中淳彦氏作曲、高知在住の音楽家たちが演奏する音楽により、子どもたちにも楽しめるように神話を紹介したものです。本来の神話の持つイメージを大切にしながら、クラシック音楽とのコラボレーションが見事に図られた幻燈劇が観客を魅了しました。

第二部では、世界的にも評価が高い、鳥根県の石見神楽「大蛇」を上演。この作品は、須佐之男命が人々

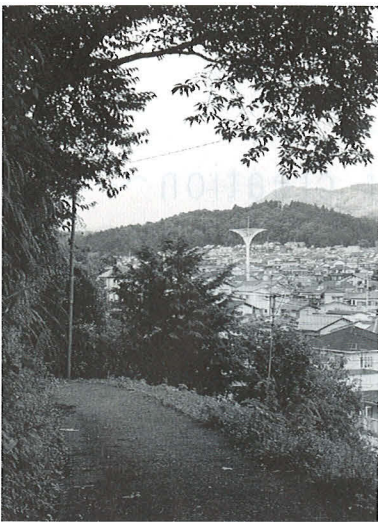
を苦しめていた大蛇を退治するという勇壮な舞で、囃子の八調子と呼ばれるテンポの早いリズムにのって、八頭立ての大蛇が火を噴きながら舞台狭しと舞う姿は迫力満点。観客は神話の持つ不思議な世界を楽しみました。

### ◆わいわい！子ども音楽会

「子ども連れで演奏会に行きたい」「子どもにも生の音楽を聴かせたい」そんな要望にお応えした、県内演奏団体による子ども向け音楽鑑賞プログラム「わいわい！子ども音楽会」を六月十八日、大ホールで二回開催しました。

昨年大好評だった鏡野吹奏楽団の演奏による童謡メドレー、大きな古時計、トトロ・ファンタジーやアンパンマンなど、大好きな曲の数々に子どもたちは大喜び。小さな子どもたちも演奏に合わせて体いっぱいリズムをとるなど大はしゃぎでした。また、演奏の合間に設けられた「指揮者にチャレンジ」のコーナーでは、客席から選ばれた子どもたちによる見事なタクトさばきに、観客からも盛んな拍手が送られていました。小さな子どもから大人まで存分に楽しんだ音楽会となりました。





## 高知 遺産

### 町中の山道

横内小学校の運動場から高知学園短期大学の入口まで、約1kmの細い山道がある。短い道ながら杉林や竹林、畑などが次々に現れておもしろい。来た道を振り返れば、住宅地の中にパチンコ店の噴水型ネオンが空に向かって伸びている様を眺めることもできる。この道は、たまにバイクが通るぐらいの「秘密の抜け道」なのだ。(和田千晶)

## 風俗

### 癌臥漫録

ころが三週間ほど経ってから、ある朝ハツと気が付くと白髪の散らかり様がひどく目に付く。ややと思つて頭髮に手をやるとお若様の光景再現だ。ブラシを当てると無惨、驚く程な白髪の群れ、以来日を追うて脱毛は正確に行われ、一週間ほど経つと頭髮の地肌が目

抗癌剤の副作用で髪の毛が抜けるというのはよく聞く話だが、実際にはそれぞれのケースがあるようだ。現に私の場合、投薬後さまざまな薬害に見舞われたが、毛髪は一本も抜けなかった。「抜けないタイプもありますよ」という主治医の話も真実味を帯びていた。

付いてきた。鏡に映る面相は、ロードオブザリングに出てくるゴラムに似てきて醜態の上もない。緑の黒髪もロマンズグレイも熟年のシルバーも余り関係のない歳になつていたので、禿げる事に悲壮感はなく、むしろ抗癌剤の効力に感心し、やがて生えて来るといふ頭髮は白か黒か、などと至極暢気な受け取り方をしていく。しかし、辺りに白髪が散らかると見苦しいし、禿を目の当たりに見せ付けられると、その非日常性に目をそむけたくなるのが普通だろう。社会常識の一つとして失礼は避けなければ、とて網状の帽子を購入、ベレー帽化しているのだが果たして格好の程はいかばかりか。

(3)



## Original goods Artist goods Ticket

かるぼーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田2-1  
高知市文化プラザかるぼーと3階  
Tel 088-883-5052  
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）  
営業時間 10:00~18:00

## 今号の表紙

こもれび 「木漏日」 高橋利美

通いなれた道。この通りはいつも私の心をときめかせ、なごませてくれます。四季折々、それぞれに美しいこの並木道のたたずまいを、心のおもむくままに、私の好きなパッチワークの技法で作品にしてみました。

(たかはしとしみ/シンゼンジョシコ)  
パッチワークキルトスクール講師



高知を撮る  
第21回写真コンテスト入賞作品

## 地引網

(昭和35年 十市)

中井 秀夫

一家総出で網を引く

思い出すだけでもぞっとする列車事故である。この人災について、直接、間接の原因があまり出される中で、「我が国の国民性が遠因にある」との指摘は核心を衝いている。一分、一秒を大切に「美徳」は「ゆとりのなさ」とセットになっている。狭い国土に、ひしめきあつて暮らして行かねばならぬ「島民」たちが持つて生まれた宿命かも知れない。イタリアでは、鉄道の五分、十分の遅れなど話題にもならない。この大らかさが、この国の文化を底辺で支えている。我が国の「ゆとりのなさ」は、教育の場にも混乱を招いている。いわゆる「ゆとり教育」が実施されてまだ日が浅い。この教育の目的は、じっくりと基礎学力をつけ、想像力や応用力を持った人間を育てることであり、「ゆとり」と「学力」は対立するものではない。

## 「ゆとり」の教育

### 風俗歳時記



まりにも忙し過ぎる。先生にゆとりがなくてはいけません。先生にゆとりがないと、その意味で、教科の時間削減や五日制は良い機会である。少し気長に学力の向上を待つことにしたい。それが待てないという人には、とりあえず、「ゆとり」の教育」を受けていただくことを。

する者まで現れた。今頃五日制にするのは、先進国では日本だけである。欧米諸国には「学校五日制」などという言葉はない。ずっと昔から土曜日は休みで、夏休みも二ヶ月くらいある。そのような欧米人がたくさんノーベル賞を買っている。大切なのは教える内容や教え方であり、時間数ではない。授業時間数と学力が、単純には比例しないことは、かつての英語の授業を考えれば明瞭である。昔、アメリカで受けた一番嫌な質問は「お前は何年間英語を勉強したか？」というのだ。ダイヤが混んでいるのはJRだけではなく。現在の教育界は、小学校から大学まで、あ





創作の秘密 ～a secret of creation～



©CLAMP イラストレーション/CLAMP

2005年7月1日(金)～9月25日(日)

展示内容はⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期で異なります

Ⅰ期：7月1日(金)～7月31日(日) Ⅱ期：8月2日(火)～8月28日(日) Ⅲ期：8月30日(火)～9月25日(日)

9:00～19:00

横山隆一記念まんが館 企画展示室

休館日●月曜日(ただし7月18日、9月19日は開館)

観覧料●企画展単独券:中学生以上500(400)円/小学生以下無料

常設展共通券:一般800(640)円/中高生600(480)円/小学生100(80)円/小学生未満無料

※( )内は団体料金(20名以上)/65歳以上の方は半額/身体障害者手帳(1、2級)、

療育手帳および精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方とその介護者1名は半額

8月7日(日)  
CLAMP  
トークショー  
&  
サイン会

トークショー 13:00～

●場 所:高知市文化プラザかるぽーと 大ホール ●入 場 料:無料

サイン会 14:30～

●場 所:横山隆一記念まんが館 企画展示室

●参加方法:当日9:00より横山隆一記念まんが館受付にて先着200名様に参加券を配布します

●参加料(オリジナル色紙代):400円

※サインはオリジナル色紙のみにいたします。またサイン会参加の際には、CLAMP四(Su)観覧料が必要です

主催●(財)高知市文化振興事業団・横山隆一記念まんが館、パイロテクニスト

お問い合わせ●〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぽーと内 横山隆一記念まんが館

TEL:088-883-5029 FAX:088-883-5049

URL:<http://www.bunkaplaza.or.jp/mangakan/> E-mail:[bunshin@i-kochi.or.jp](mailto:bunshin@i-kochi.or.jp)

